

依他起性の雑染性と清浄性について

薊 法 明

〔抄 録〕

本論は、三性説の中の依他起性の雑染・清浄性について考察することを主題としている。というのも、諸経論において依他起性の雑染・清浄性を記述する部分が少なくとも表面上は異なっており、『解深密経』等においては依他起性は基本的には雑染とされながらも、一部では清浄ともされている部分が見受けられるのである。そうなると果たして依他起性は雑染なのか、清浄なのかということが問題となる。よって初期唯識学論書を資料として、それについて説かれている部分を検討することが本論の主旨である。

キーワード：三性説，依他起性，雑染，清浄

はじめに

依他起性の雑染性と清浄性について考察する¹⁾。というのも諸経論によって、または一経論中においても部分によって、依他起性の雑染と清浄が共に説かれている部分が存在し、依他起性が雑染なのか清浄なのかという見解が一致していない。これは唯識思想における三性説の構造的相違や構造的変化に関係するものであり重要であると考え。

依他起性の雑染と清浄という観点からの考察は先学によってなされている。例えば武内紹晃氏によると、この点について教学的に理論的な面で依他起性を述べる場合は、依他起性を雑染清浄にわたる基盤とし、修道とか実践という立場で述べられる場合には、依他起性は断ぜられるべきもの、すなわち雑染ということになるとしている²⁾。

そこで二つの点で疑問が生じる。一点目は、唯識思想において依他起性を果たして教学面と実践面とに分けて異なったことを述べるであろうかという点と、二点目は、そうなると依他起性は雑染なのか清浄なのか、それともどちらでもない例えば、無記のようなものなのかという疑問である。そこで、以下に諸経論における依他起性の雑染性、清浄性について考察したい。

a) 『解深密経』

三性説が組織的に説かれている現存の最古の文献は『解深密経』である³⁾。しかし、既に指摘されているように⁴⁾、三性はそれぞれ別な主題の下で扱われており、それぞれ充分に発展したものでなく、相互に関連し合うことも少ないように思われる。『解深密経』⁵⁾における依他起相は基本的には雑染とされながらも、一部、清浄ともされている。以下にその部分を指摘する。

徳本よ、例えば、透明な水晶それ自体のように依他起相は知られるべきである。

たとえば、とても透明な水晶自体は、かのマニ宝や藍石やルビーやエメラルドの宝石や黄金としては、常には成り立たず、自性のないものである。そのように依他起相自体は、かの遍計所執相としては常に成り立たず、自性がないということによって円成実相が知られるべきである。

徳本よ、その中で、相 (nimitta) と結合した名前によって遍計所執相がよく知られる。依他起相に対して、遍計所執相として執着することによって、依他起相がよく知られる。依他起相に対して、遍計所執相として執着することがないことによって、円成実相がよく知られる⁶⁾。

この部分は、有名な「水晶の譬喩」⁷⁾の直後であり、水晶の譬喩によって三性の特徴を具体的に説明している部分である。前の部分において水晶の下に様々な色の布等をしくと、マニ宝に見えたり、エメラルドに見えたりする譬喩をうけ、依他起性は本来的には清浄であることが述べられている⁸⁾。しかし、この部分の引き続いた所に以下の記述がある。

徳本よ、その場合、菩薩が諸法の依他起相において遍計所執相を如実に理解するならば、無相の法を如実に理解するのである。徳本よ、そこにおいて菩薩が依他起相を如実に理解するならば、雑染の法を如実に理解するのである。徳本よ、そこにおいて菩薩が円成実相を如実に理解するならば、清浄相⁹⁾の法を如実に知るのである。そこで菩薩が依他起相において無相の法を如実に理解するならば、雑染の相の法を断じるのである。雑染相の法を断じるならば、清浄相の法を証得することになる。菩薩がいかなる事であれ、そのように諸法の遍計所執相と依他起相と円成実相を如実に理解し、無相と雑染相と清浄相を如実に理解する、その一方で無相の法を如実に理解してから雑染相の法を断じ、雑染相の法を断じるならば、清浄相の法を獲得することになるから、このことによって、諸法の相に巧みな菩薩なのである。如来が「諸法の相に巧みな菩薩」というのはこのことによって設けられるのである¹⁰⁾。

今度は遍計所執相を無相の法、依他起性を雑染の法・雑染の相のある法、それから円成実性を清浄の相のある法と、このように述べている。そしてその中で、「無相の法 (つまり遍計所執相) を如実に知ることによって雑染の法 (つまり依他起相) を断ずる」ということが書かれている。つまりここでは、依他起相を断ずることによって清浄法である円成実性が証得されると

いうことになる¹¹⁾。

そこで『解深密経』における依他起相の雑染・清浄については二つの見解、

① 遍計所執相と円成実相、つまり雑染と清浄の共通の基盤であり、本来的には清浄である
依他起相

② 雑染の法または、雑染の相であり、断ぜられるべき依他起相

があることになる。また②における雑染から清浄へ移行する構造的な変化は、雑染な依他起相を断ずる事により清浄な円成実相が証得されるということになる。

b) 『瑜伽論』¹²⁾

『瑜伽論』(特に「撰決択分」と『解深密経』の親密性は既に指摘されているように、前者が後者のほぼ全文を引用していることから知られる¹³⁾。『瑜伽論』において、三性を集中的に論じている部分は、「撰決択分中菩薩地」である。既に指摘されているように『瑜伽論』の「撰決択分」の三性説が、三つのウッダーナによって示されている¹⁴⁾。前述のように『瑜伽論』「撰決択分」に三性説が説かれており、依他起性の雑染と清浄についても言及がなされている¹⁵⁾。

依他起性とは何かと言えば、縁起を自性とするものである。

依他起性は何によって知られるべきか。答えて曰く。遍計所執性として執着することによって知られる。

ここにおいて依他起性は、縁起を自性とするものであり、遍計所執性として執着することによって知られる。そうなるに依他起性は雑染なるものと考えている。次に、

もし、依他起性が正智によって理解されるならば、そこにおいて、「依他起性は遍計所執性に執着することによって理解されるであろう。」と説かれたその事はどうなるのか。答えて曰く。それについては、雑染となっている依他起性について考えるのであって、清浄となっている〔依他起性〕については、清浄になっている〔依他起性〕は、その〔遍計所執性〕として執着しないことによって知られるであろう、と認識されるべきである¹⁶⁾。

また、

依他起性には、何種類存在するのか。答えて曰く。その種類は因相の如くに〔無数である〕と考えるべきである。なおも又、依他起性は二種であって、すなわち遍計所執性に執着することによって起こっているものと、その(遍計所執性)として執着しないことによって起こっているものである¹⁷⁾。

依他起性についての上記の内容は、依他起性が雑染なものとして論議されていながらも、清浄なものとしても考えられている。兵藤一夫氏によれば、これは、正智として出世間智ばかりでなく、世間出世間智(後得清浄世間智)が加えられた為であるとしている。しかし、その他の部分を含め、全体としては、依他起性を雑染なものとして捉えた上で議論がなされている¹⁸⁾。

以上のことから見て、『瑜伽論』『撰決択分』と『解深密経』の依他起性における雑染・清浄の捉え方は同じである。しかし、雑染めから清浄へ移行する構造的な変化は、『解深密経』のそれとは異なり、雑染な依他起性は遍計所執性として執着しないことによって清浄な依他起性になるということである。

『瑜伽論』の直系である『顕揚聖経論』においては依他起性を相と麤重の二縛と規定していることと、依他起性を雑染として規定している点が特徴である¹⁹⁾。そして、以下のように依他起性は遍計所執性に執着している為に熏習を起こすと雑染なものとなることが示されている。そして、円成実性は清浄であり、これは有漏性が無漏性の転依によることであるとしている。

於依他執初	熏習為雑染
無執円成実	熏習為清浄
雑染有漏性	清浄則無漏
此当知転依	不思議二種

論曰、於依他起自性執著初自性故、起於熏習則為雑染。当知円成実自性無執著故。起於熏習則成清浄。雑染即是有漏性。清浄即は無漏性。此無漏性当知即是転依相²⁰⁾。

また、雑染から清浄へ移行する構造的な変化は、転依による雑染な依他起性から清浄な円成実性への変化であるとしている。

c) 『大乘莊嚴経論』²¹⁾

『大乘莊嚴経論』においては、三性は虚妄分別と結び付いているが重要な思想としての位置付けがなされていない。その中で、依他起性の雑染と清浄については頌において直接明言されていないが、世親・安慧・無性の註釈によって関連づけられている部分を示す。

(以下、大乘莊嚴頌をM、その長行をVとする。)

tatvaṃ yat satataṃ dvayena rahitaṃ bhrānteś ca saṃniśrayaḥ
 śavyaṃ naiva ca sarvathābhilapitūṃ yac cāraṇicātmakam/
 jñeyaṃ heyamatho viśodhyam amalāṃ yac ca prakṛtyā mataṃ
 yasyākāśasuvārṇavarīsadṛṣī kleśād viśuddhir matā //13//²²⁾ (XI・13M)

訳：真実は〔所取・能取の〕二を常に離れているものと、迷乱の所依と、全面的に言語表現を離れていること・無戲論を性とするものである。〔それは〕又知られるべきものであり、捨てられるべきものであり、自性として無垢で浄化されるべきものであり、虚空と金と水との如きものは煩惱からの清浄があると考えられている。

(XI・13 V)「真実は二を常に離れているもの」とは、遍計所執の自性であり、所取と能取との相によって、畢竟して無性なるが故なり。「迷乱の所依」とは、依他起性であり、これ(迷乱)によってそれ(二を)分別せられるからである。「全面的に言語表現を離れていること・無戲論

を性とするもの」とは、円成実の自性である。この中で、第一の真実は遍知せらるべきもの、第二は捨てられるべきもの、第三は清浄にせらるべきものである。また客塵の垢から離れて清浄になっている、その自性としての清浄は、虚空と金と水の如くであって、煩惱から清浄になっている。何となれば、虚空等は自性として不清浄ではなく、しかも客塵の垢から離れているからこれらのものの清浄が認められないのではない²³⁾。

これに対し安慧は註釈において²⁴⁾、「迷乱の所依」とは依他起性であり、繩を蛇として分別する如くに、依他のものによって所取・能取を分別する因となるから「迷乱の依他」といわれる²⁵⁾としており、その後で「すなわち依他起性において存在する所取・能取の垢は浄化されるべきである²⁶⁾」としている。

また無性はこの頌の註釈において²⁷⁾、依他起性の雑染・清浄について言及は行っていないが、本頌の冒頭の真実 (tatva) について、「真実とは不欺誑と無顛倒であり、出世間智を獲得した事による所縁が真実であり、雑染と清浄との一切法を等しく考察するものである²⁸⁾。」としている。

『大乘莊嚴經論』XI・13の頌とその長行、また安慧の註釈によると依他起性は捨てられるべきであり、円成実性を浄化されるべきものとしている。そうなるに依他起性は雑染なものとして捉えられている。次に、三十二、三十三頌に雑染と清浄の探求についての二頌が述べられている。

svadhātuto dvayābhāsāḥ sāvidyākleśavṛttayaḥ /
vikalpāḥ sampravartante dvayadravyavivarjitāḥ //32//²⁹⁾ (XI・32M)

訳：自界から無明と煩惱と共に二（取）の顯現が妄分別なるものとして生起する。〔このことは〕二つの事物から離れたものである。

ālabhanaviśeṣāptiḥ svadhātusthānayogataḥ /
ta eva hy advayābhāsā vartante carmakāṇḍavat //33//³⁰⁾ (XI・33M)

訳：自界の処に対する精勤によって、特殊な所縁が証得せられる。実にその同じものが不二の顯現として生じる。〔例えばそのことは〕皮と矢竹の如くである。

この二頌に対する世親の註釈によれば自界とは種子・アーラヤ識であり³¹⁾、自界とは虚妄分別の自界であり、処とは名前において心の処が確定することであり、それが転依の場合に不二の顯現として生じるのである³²⁾。また既に指摘されているが依他起性は何ら変化するものではなく、依他起性の内部における雑染法から清浄法への変化であるとする³³⁾。そうなるに雑染から清浄へ移行する構造的な変化は、依他起性の内部における変化となる。

d) 『中辺分別論』³⁴⁾

『中辺分別論』においては、「相品」第一及び「真実品」第三に三性説を説く部分が存在して

いる。おそらく「相品」と「真實品」等とは、一貫した構想の下に説述されているにちががなく、その間に明白な矛盾が見出せないかぎり、統一的に理解されるべきである³⁵⁾。また『中辺分別論』には、『大乘莊嚴經論』と同じく、いわゆる本偈(弥勒)とその長行(世親の註釈)及び、安慧の註釈などが存在する。『中辺分別論』においても依他起性は虚妄分別と結びつけられており、依他起性は雑染なものとして捉えられており、依他起性の清浄性については説かれていない。

chādanād ropanāc caiva nayanāt saṃparigrāt /
pūrapāt tri-paricchedād upabhogāc ca karṣaṇāt //10// (I・10M)
nibandhabād ābhimukyād duḥkhanāt kliśyate jagat /
tredhā dvedhā ca saṃkleśaḥ saptadhā 'bhūta-kalpanāt //11//³⁶⁾ (I・11M)

訳：覆うから、建立するから、導くから、撰持させるから、満たすから、三つのものの判別があるから、享樂するから、引き出すから、結びつけるから、面前に存在するから、苦しませるから、生あるものは苦惱する。三種、二種、及び七種の雑染〔の存在〕であり、虚妄分別に由来するのである。

とあり、虚妄分別、ここでは依他起性を雑染なものとしている。この偈に対する世親と安慧の註釈を要約すると、虚妄分別なる分別の結果として、十二支の縁起と三種、二種、七種の雑染との結果が説かれ、その三種の雑染すなわち煩惱の雑染(kleśa-saṃkleśa)、業の雑染(karma-saṃkleśa)、生の雑染(janma-saṃkleśa)であり、煩惱の雑染とは、十二支の中の愛と取とであり、業の雑染は行と有であり、生の雑染はその他の諸支である。二種の雑染とは、原因としての雑染(hetu-saṃkleśa)と結果としての雑染(phala-saṃkleśa)とに分かれ、七種の雑染とは、七種の原因(hetu)のことであり、顛倒(viparyāsa)の因、引生(ākṣepa)の因、導く(upanaya)因、撰受(parigraha)の因、享樂(upabhoga)の因、引き出す(ākaraṣaṇa)因と、そして〔この世を〕憂う(udvega)因とであるとしている³⁷⁾。このように十二支縁起と三つの雑染すなわち煩惱雑染・業雑染・生雑染が説かれているが、この三つの雑染については、既に指摘されているが『解深密経』『瑜伽論』等においても記述がみられる³⁸⁾。また、同じく相品の第16偈は空性の分類として、次のように述べている。

saṃkṣiptā ca viśuddhā ca samalā nirmalā ca sā /
abdhūtu-kanakākāśa-śuddhivac chuddhir iṣyate //16//³⁹⁾ (I・16M)

訳：雑染されたものと、清浄なものがあり、それ(雑染されたもの)は垢をとともなうものであり、そして、(清浄なものは)垢から離れたものである水界や金や虚空のように清浄であると考えられるからである。

これに対して安慧は空性の分類に対し、どの様に知るべきかと言えば、虚妄分別は雑染であり、それを断ずるときに清浄があるとしている⁴⁰⁾。この見解によると、雑染である虚妄分別を断じたときに、清浄な空性が現れるのであるが、その虚妄分別と空性との両者の関わり方は、

前者が後者の清浄性を覆うという関係にある⁴¹⁾。そうなると虚妄分別、いわゆる依他起性は『中辺分別論』においては、雑染なものとしてのみ記述されている。そして雑染から清浄へ移行する構造的な変化は、雑染な依他起性が減することにより清浄な空性が現れるということになる。

e) 『撰大乘論』⁴²⁾

次に『撰大乘論』における依他起性は虚妄分別と結合しており、依他起性の雑染と清浄についても記述があるので以下に示す。まず「所知相分」(II・28)には、

世尊は何を意図して、『梵問經』の中に、「如来は輪廻を見ることなく、涅槃を見ることもない。」と説かれたのかと云えば、依他起性は、遍計所執性と円成実性であるが故に、輪廻と涅槃とに差別がないということを意図してそう説いて、依他起性は遍計所執の分としては輪廻であり、円成実の分としては涅槃であるからである⁴³⁾。

ここから、二分依他についての説明が始まる。ここでは、輪廻と涅槃に差別のない立場が説かれ、依他起性は両者を媒介する土台として説かれている。しかし、輪廻は涅槃とは異なっている一面も当然存在する。この部分を世親は「…依他起は輪廻ではない。というのも、それは涅槃という理由からである。遍計所執の法によって、それは涅槃ではない。輪廻なのである。それ故、一つのものとして説くことはできないとみなすから、一つのものとして悟入されたものである分別の本質はないのであり、輪廻もまた不可得であるといわれたのは、それを想いとしてそこに説かれたのである⁴⁴⁾。」と註釈している。そして第二章の二十九節には、

『阿毘達磨大乘經』において、世尊が「法は三つである。雑染分に属するものと清浄分に属するものと、その二分に属するものである。」と説いたのは何を意図して説いたのかと云えば、依他起性の中に遍計所執性があることが雑染分に属する。[また依他起性において]円成実性があることが清浄分に属する。依他起性そのものがそれら二分に属するものである。このことを意図して説かれたのである⁴⁵⁾。

このように、『阿毘達磨大乘經』を引用して諸法には雑染分、清浄分、雑染清浄分の三種があるということを述べ、遍計所執性は雑染分であり、円成実性は清浄分であり、依他起性は彼の二分と説かれている。しかし、一方において以下の第二章二十五節のように依他起性を円成実性と対比させて雑染として扱う記述がみられる。

顕われている如く、その如くに存在しないならば、依他起性はあらゆる意味で一切無であるということにどうしてならないか〔と云えば〕、それが無いとき円成実性は無いのである。一切が無いことにならないのかと云えば、依他起と円成実との自性がないならば、雑染と清浄が無いという誤謬に陥るからである。〔けれども〕雑染と清浄は否定できない。それ故に、一切が存在しないというものではない。ここに偈がある。

依他起と円成実とが一切種において無い時、雑染と清浄とは一切時にも無いことになる⁴⁶⁾。

この様に円成実性の清浄に対して依他起性は雑染であると規定している。しかし、雑染から清浄へ移行する構造的な変化は、あくまでも依他起性の内部における変化であると考えられる。

f) 『三性論偈』⁴⁷⁾

『三性論偈』はもっぱら三性説を主題とする世親の作品であり、全三十八偈の中に三性各性の有・無、一・異等、種々の教説が盛り込まれているが、説相は『中辺分別論』や『大乘莊嚴經論』との関係が深い⁴⁸⁾。基本的な三性説については、以下のように述べられている。

kalpitaḥ paratantraś ca jñeyam saṃkleśalakṣaṇam /
pariṇiṣpanna iṣṭas tu vyavadānasya lakṣaṇam //17//⁴⁹⁾

訳：遍計所執性と依他起性は雑染を特徴とするものであると知るべきであり、一方、円成実性は清浄なる特徴のものであると認められる。

以上諸経論における依他起性の雑染・清浄に関する部分を挙げてみた。まず、この節の冒頭に述べた武内氏の見解について検討してみたい。それは、教学的に理論的な面で述べる場合は依他起性を雑染・清浄にわたる基盤という形で述べられ、修道とか実践という立場で述べる場合には、依他起性は断ぜられるべきもの、いわゆる雑染とするという見解であるが、あてはまる部分も多いがすべてにあてはまるものではない。例えば、『顕揚聖教論』、及び『中辺分別論』において依他起性は捨てられるべきものであり、雑染なものとしてされているが、これらの部分は三性を理論的に説明している部分である。そうすると武内氏の見解は諸経論すべてに当てはまるものではない。次に依他起性は雑染なのか、それとも清浄なのかという点については以下に該当部分において言えることを示す。

- ① 既に指摘されているが⁵⁰⁾、『解深密経』においては既に示した二つの見解、すなわち遍計所執性と円成実性、つまり雑染と清浄の基盤であり本来的には清浄とする依他起性と雑染の法、又は雑染の相であり断ぜられるべき依他起性であるが、これは『瑜伽論』においても同様の記述が見られる。この場合前者の依他起性は水晶に喩えられており、『解深密経』のこの部分の記述は重要であると考えられる。
- ② 『顕揚聖教論』においては、依他起性は雑染なものとしてされ転依によって清浄な円成実性になるとされている。そして熏習との関わりの中で述べられている。
- ③ 『大乘莊嚴經論』の本頌においては依他起性の雑染・清浄については直接明言されていないが、長行と安慧・無性の註釈によると依他起性は捨てられるべきものであり、雑染なものとしてされている。
- ④ 『中辺分別論』において依他起性は、客塵煩惱のごとくに扱われ雑染とされている。また、『三性論偈』は単に依他起性を雑染としている。

- ⑤ 『撰大乘論』においては依他起性において遍計所執性を染汚分とし、円成実性を清浄分とし依他起性を染汚清浄分としている。この見解は他の諸経論の見解よりも発展したものと考えられる。しかし、一方では円成実性の清浄に対して依他起性は雑染であるとしている。これは依他起性を水晶に喩えている『解深密経』と依他起性を雑染であり捨てられるべきものであるとする部分とは大きく異なる。

おわりに

依他起性の雑染性・清浄性については、各諸経論によって見解が異なっていた。特に『解深密経』等のように依他起性を水晶すなわち本性清浄とする見解と、『中辺分別論』のように依他起性を客塵煩惱の如くに扱う見解とは大きく異なる。また、これたの思想の発展した形として『撰大乘論』の二分依他があげられる。そうなるに冒頭に挙げた疑問点を踏まえ述べると、一点目の武内氏の見解については既に述べたように考察したすべての諸経論に当てはまるものではない。そして、二点目の依他起性は雑染なのか清浄なのかという点については、基本的に依他起性は雑染であると考え。というのは依他起性を雑染としている部分が大半であり、清浄であってもそれはあくまで世俗的な清浄であることが述べられているように感じた。次に雑染から清浄へ移行する構造的な変化についてであるが⁵¹⁾、諸経論により大きく異なっていた。これは依他起性を雑染としながらも、清浄へ移行する構造にいくつかのパターンがあると考え。よってこの点については、より一層の検討が必要である。又、これからの課題としては、三性説と如来蔵思想との関連性について検討する必要があると考える。というのも、本性清浄などといった如来蔵思想を認める記述が経論中に見られ、両者の関係は重要である。

〔注〕

1) 唯識思想における雑染・清浄についての研究は以下のものがある。

①安井 [1954] ②丹治 [1961] ③勝呂 [1967] ④氏家 [1970] ⑤宮下 [1978] ⑥武内 [1983] ⑦池田 [1997]

①においては特に『中辺分別論』における雑染清浄について考察を行っている。

②においては円成実性の性格を *avikāra* と *aviparyāsa* 及び *aviparīta* との関係において考察し、その中で雑染と洗浄の存在について述べている。

③においては唯識思想の中に如来蔵思想の浸透性が強いことを述べており、諸経論中における雑染・清浄について検討している。

④においては識転変の教説を中心に、輪廻的な現実心が何を原因としてどの様に展開するのかを追求する唯識説が、同時に清浄心つまり悟りの世界をどの様に志向していたかということについて考察を行っている。

⑤においては業雑染に関するAsaṅgaの見解として、『撰大乘論』の第一章の検討を行っている。

⑥においては三性の中の特に依他起性を中心に考察しており、その中で雑染と清浄について検討している。

⑦においては『顕揚聖教論』と『中辺分別論』における依他起性の雑染清浄を中心として考察が行われ、三性の構造の相違等を指摘している。

2) 武内 [1983] 125頁

3) 『解深密経』は『瑜伽論』「撰決択分」においてはほぼ全文が引用されているので、『解深密経』の方が先行すると考えられる。一方、『瑜伽論』「本地分」との関係は必ずしも明らかではない。勝呂 [1989]、289-290頁において『解深密経』は「本地分」と「撰決択分」の間の成立であるとする。また、勝呂 [1967] 254頁においては以下のように述べられている。「解深密経と瑜伽論の前後は確認したいが、三性の名称のみは、瑜伽論卷十三に出ているにしても、これが論ぜられているのは撰決択分であるから、このかぎり解深密経が先と考えてよいであろう。」筆者もこの見解に従い考察を進めることとする。兵藤 [1990] 注⑤参照。

4) 兵藤 [1990] 25、35頁。また註①にあるように、『解深密経』に説かれる三性説が唯識説と結びついていないことは既に指摘されている。

5) 『解深密経』における依他起性の雑染清浄についての研究は、勝呂 [1967]、武内 [1983] があり、勝呂 [1967] 259-260頁においては「分別瑜伽品」に依他と円成は雑染と清浄であると併記していることは、雑・清の存在論的把握について二元論的であったことを示しているとし、その理由として小乗のアビダルマへの顧慮をより多くもつからであるとしている。

6) SNS. VI, 9・10pp.62-63, 大正、16巻、693中、670頁下。

7) 「水晶の譬喩」は、SNS. VI, 8・9 pp.61-62, 大正、16巻、693頁上-下、669頁下-670頁上に説かれている。勝呂 [1967] 256-257頁において水晶の譬喩は心性本浄説の説明に用いられることがあるとしながらも、この部分においてはそれに当てはまらない点を三点挙げている。筆者は勝呂氏の説を踏まえつつもやはり、この水晶のたとえは心性本浄説のたとえとして見るべきであると考え。

8) このほかに『解深密経』における依他起性の清浄性を示す部分として、SNS. VII, 25・26・27. pp.80-83, 大正、16巻、703頁中-704頁上などがある。

9) 袴谷憲昭『唯識の解釈学』108頁には清浄について以下のように述べられている。

「《清浄》チベット訳はrnam par byang ba、対応サンスクリットは vyavadāna。浄められたあり方で先の雑染を脱した状態を指す。通常、これには二種類があると考えられており、一方は世間的清浄 (laukikavyavadāna)、他方は出世間的清浄 (lokottaravyavadāna) である。世間的清浄から出世間的清浄に至ることによって輪廻から解脱するという考え方がここには示されている。」

この様に袴谷氏は清浄について説明を行っている。ここにおいては依他起性が雑染相と関係づけられている部分であり、円成実性を雑染を脱した状態として清浄としている。

10) SNS. VI, pp.63-64, 大正、16巻、639頁下、670頁上-下。

11) 武内 [1983] 124頁。またこの点については、勝呂信静『初期唯識思想の研究』308-309頁に詳しく説かれている。

12) 『瑜伽論』における依他起性の雑染清浄についての研究は、勝呂 [1967]、兵藤 [1991] がある。

- 13) 兵藤 [1991]、2頁。
- 14) 勝呂 [1985] [1987] には『瑜伽論』「撰決撰分」の三性説が五事との相撰関係の中で詳しく論じられている。特に勝呂 [1987] 442-444頁において三性三無性についての論議の内容が三種のウッダーナにおいて要約されていることが述べられており、三性説を考察する際に重要である。
- 15) 『瑜伽論』における依他起性の雑染と清浄については、*Vis. XV, P.19b5-29b5*の部分にまとめて説かれている。
- 16) *Vis. XV, P.24b2-4*, 大正、30巻、704頁下。
gal te gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid yang dag pa'i shes pas bsdus pa yang yin na / de na gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid kun btags pa'i ngo bo nyid la mngon par zhen pa la bten nas shes par 'gyur ro zhes smras pa de ji lta bu zhe na / smras pa / der ni kun nas nyon mongs par 'gyur ba'i gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid la bsams pa yin gyi rnam par byang bar 'gyur bar las ni ma yin te / rnam par byang bar 'gyur ba ni de la mngon par ma zhen pa la brten nas shes par 'gyur ba yin par rig par bya'o //
- 17) *Vis. XV, P.24b6-8*, 大正、30巻、705頁中。
gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid rnam pa du yod ce na / smras la / di'i rnam pa rab tu bye ba ni rgyu mtshan bzhin du blta bar bya'o // gzhan yang gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid rnam pa gnyis te / kun btags pa'i ngo bo nyid la mngon par zhen pas kun nas blang ba dang / de la mngon par zhen pa med pas kun nas blang ba'o //
- 18) 兵藤 [1991] 4頁。
- 19) 大正、31巻、558頁下-559頁上。
- 20) 大正、31巻、559頁下。
- 21) 『大乘莊嚴經論』における依他起性の雑染清浄についての研究は、勝呂 [1967] 262-274頁がある。ここにおいて勝呂氏は迷悟・染浄に関する大乘の一元論的思想は、『大乘莊嚴經論』においてより有力に導入されたとし、この点に関する限り、『瑜伽論』と反対の方向を指し示すものであると述べている。
- 22) *MSA. XI, p.58, ll.16-19*. 大正、31巻、611頁上、*MSA. H.168*頁、*MSA. U.202-204*頁。
- 23) *MSA. XI, p.58, ll.21-26*. 大正、31巻、611頁上-下、*MSA. H.168-169*頁、*MSA. U.203*頁。
- 24) *SAVBh. P.193a4-194a1*.
- 25) *SAVBh. P.193b2-3*.
nor pa'i gnas zhes bya ba la nor pa'i gnas ni gzhan gyi dbang gi mtshan nyid de thag pa la sbrul du rtog pa bzhin du gzhan dbang de gzugs ba dang 'dzhin pa lta bur tiog pa'i rgyu byed pa'i phyir nor pa'i gnas zhes bya'o // gzhan dbang gis gzung 'dzin lta bur rtogs pas so //
- 26) *SAVBh. P.193b6*.
gzhan dbang la yod pa'i gzung 'dzin gyi dri ma sbyang dgos pa'i phyir ro //
- 27) *MSAT. P.193a2-6, 95a5-8*.
- 28) *MSAT. P.94b3-4*.
de kgo na nyid mi bslu ba dang / phyin ci log pa gang yin pa'o / de 'jig rten las 'das pa'i ye shes thob pas dmigs pa gang yin pa de ni kho na nyid yin te / kun nas nyon mongs pa dang rnam par byang ba ba'i thams cad ky'i de kho na myid sphyr brtag pa yin no //

- 29) *MSA*. XI, p.63, ll.3-4. 大正、31巻、613頁上、*MSA*.H. 109頁、*MSA*.U.216頁。
- 30) *MSA*. XI, p.63, ll.8-9. 大正、31巻、613頁上、*MSA*.H. 109頁、*MSA*.U.216頁。
- 31) *MSA*. XI, p.63, ll.5. 大正、31巻、613頁上、*MSA*.H. 109頁、*MSA*.U.216頁。
- 32) *MSA*. XI, p.63, ll.11-12. 大正、31巻、613頁上、*MSA*.H. 110頁、*MSA*.U.217頁。
- 33) 勝呂 [1967] 271頁。勝呂氏は269-270頁において、該当部分における依他起性の雑染と清浄について詳しく論じられており、大変参考になった。
- 34) 『中辺分別論』における依他起性の雑染清浄についての研究は、氏家 [1954] 22-30頁、安井 [1954] 242頁、丹治 [1961] 126頁がある。
- 35) 竹村牧男『唯識三性説の研究』105頁。
- 36) *MVBh*.p.21, ll.9-11, *MVBh*.N.228-231頁、大正、31巻、465頁中、452頁上。
- 37) *MVBh*.p.21, ll.12-20, p.21, ll.22-p.22, l.9. *MVT*. Y.55-66頁、大正、31巻、465頁中、452頁上-下。
- 38) 舟橋尚哉『初期唯識思想の研究』332-335頁。
- 39) *MVBh*.p.22, ll.5-12, *MVBh*. N. 235-236頁、大正、31巻、465頁下、452頁下。
- 40) *MVT*. Ya. p.51, ll.10-14. *MVT*. Y. 81頁。氏家 [1970] 25頁。
- 41) 氏家 [1970] 25頁。
- 42) 『撰大乘論』における依他起性の雑染清浄についての研究は、氏家 [1954] 30-33頁、神谷 [1976] 734頁、武内 [1983] 125頁がある。
- 43) *MS*. p.39, *MS*.N. 373頁。
- 44) *MSBh*. P. 182b8-183a5. D.152b7-153a3. 大正、31巻、345頁上。武村牧男『唯識三性説の研究』511-512頁にも、この部分が指摘されている。
- ngo bo nyid gsum gyi mtshan nyid kyi chos kyi chos nyid de dag ji ltar mdo las 'byung ba dang rjes su
 mthun bar 'gyur pa yin zhe na / de ni bstan par bya ba'i phyir / tshang pas zhus pa las bcom ldan 'das kyis ci
 las dgong te / de bzhin gshags pa 'khor ba yang ma dmigs mya ngon las 'das pa yang ma dmigs zhes bstan
 ces bya ba gang / 'khor ba dang mya ngon las 'das pa nyid bye btag med pa las dgongs nas bstan ces bya ste /
 gzhan gi dbang ni 'khor ba ma yin te / gang gi pgyir de mya ngan las 'das par 'gyur bas so // kun tu brtags pa'i
 chos ni de mya ngon las 'das pa yang ma yin te 'khor ba yin no // des na gcig pa nyid du brjod par mi nus par
 gzigs nas gcig nyid du zhugs pa'i bye brag gi ngo bo med pas 'khor ba yang ma dmigs la mya ngan las 'das pa
 yang ma dmigs zhes bya ba ni de la dgongs nas der gsungs pa yin no //
- 45) *MS*. pp.39-40, *MS*.N. 376頁。
- 46) *MS*. p.37, *MS*.N. 359-360頁。氏家 [1970] 28頁には、依他起性の雑染性について述べられているので参考にした。
- 47) 『三性論偈』における依他起性の雑染清浄についての研究は、氏家 [1954] 28-29頁がある。
- 48) 竹村牧男『唯識三性説の研究』16頁。
- 49) *TN*.p.127. *TN*.N. 203頁。
- 50) 武内 [1983] 124-125頁。
- 51) この点に関しては池田 [1997] において、『中辺分別論』と『顕揚聖教論』についての雑染から清浄への構造的変化について述べられているが、『顕揚聖教論』の清浄と雑染の定義については、本論で

示しているように池田氏と見解が異なる。しかしながら、依他起性の雑染から清浄への構造的変化については、池田氏の手法を用い諸経論において考察を行った。

Abbreviations

- 印仏研 『印度学仏教学研究』、日本印度学仏教学会。
- 大正 『大正新修大蔵経』。
- D. The Sde dge edition of the Tbetan Tripiṭaka.
- MS. *La somme du grand véhicule d'Asaṅga*, Tome I; Texte, ed. par E. Lamotte, Louvain, 1973.
- MS. N. 長尾雅人『撰大乘論 和訳と注解』上・下、講談社、1982・1987年。
- MSA. Asaṅga, *Mahāyāna-Sūtrālamkāra*, Exposé de la Doctrine du Grand Véhicule selon le Système Yogācāra, Tome I; Texte, éd. par S. Lévi, Paris, 1907.
- MSA. U. 宇井伯寿『大乘莊嚴經論研究』岩波書店、1961年。
- MSA. H. 袴谷憲昭・荒井裕明校注『新国訳大蔵経 瑜伽・唯識12 大乘莊嚴經論』大蔵出版、1993年
- MSA.T. Theg pa chen po'i mdo sde'i rgyan gyi rgya cher bshad pa (*Mahāyānasūtrālamkāraṭīkā*) ,P. No. 5530 [Bi45a5-196a7] (Vol.108) ,D. No. 4029. [Bi38b6-174a7] (Vol. 2) .
- MSBh. Theg pa chen po bsdus pa'i 'grel pa (*Mahāyānasamgrahabhāṣya*) , P. No 5551 [Li141b2-232b5] (Vol. 112) , D. No. 4050. [Ri 121b1-190a7] (Vol. 12) .
- MVBh. *Madhyāntavibhāga-Bhāṣya*, A Busshist Philosophical Treatise, ed. by G. M. Nagao, Tokyo, 1964.
- MVBh. N. 長尾雅人訳「中辺分別論」『大乘仏典15 世親論集』中央公論社、1976年。
- MVT. Y. 山口益訳注『中辺分別論釈疏』破塵閣書房、1966年。
- MVT. Ya Sthiramati, *Madhyāntavibhāgaṭīkā*, Exposition Systématique du Yogācāravijñaptivāda, éd. S. Yamaguchi, Nagoya, 1934.
- P. The Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka.
- BAVBh. mDo sde rgyan gyi 'grel bshad (*Sūtrālamkāra-vṛtti-bhāṣya*) P. No. 5531, Mi.1-TSi, 308a8, D. No. 4034, Mi, 1-TSi, 226a7.
- SNS. *Samdhinirmocanasūtra*, éd. tr. par E. Lamotte, Louvain, 1935.
- TN. 山口益「世親造説三性論偈藏本及びその注釈的研究」『山口益仏教学論集』上、春秋社、1972年。
- TN. N. 長尾雅人訳「三性論」『大乘仏典15 世親論集』中央公論社、1976年。
- ViS. I-XVII Rnal 'byor sptod pa'i sa nram par gtan la dbab pa bsdus ba (*Yogācārabhūmi-Viniścayasamgrahaṇī*) , P. No. 5539 (Vol. 110) , D. No. 4038 (Vol. 8-9) .

〔参考文献〕

単行本

- 勝呂 信静 『初期唯識思想の研究』春秋社、1989年。
竹村 牧男 『唯識三性説の研究』春秋社、1995年。
袴谷 憲昭 『唯識の解釈学—『解深密経』を読む』春秋社、1994年。
舟橋 尚哉 『初期唯識思想の研究』国書刊行会、1976年。

論文

- 池田 道浩 1997 「依他起性、雑染、清浄」『駒沢短期大学仏教論集』第3号、233-242頁。
氏家 昭夫 1970 「唯識思想における雑染と清浄の問題」『密教文化』第93号、22-35頁。
勝呂 信静 1967 「初期唯識説における三性説の構造」『金倉博士古希記念 印度学仏教学論集』平楽寺書店。
1987 「『瑜伽論』撰決択分における五事・三性説(続編)」『野村耀昌博士古希記念論集 仏教史仏教学論集』春秋社、441-469頁。
武内 紹晃 1983 「依他起(パラタントラ)と他力」『龍谷教学』第18号、122-136頁。
丹治 昭義 1961 「唯識派におけるavikāraとaviparyāsaについて」『印仏研』第9巻1号、126-127頁。
兵藤 一夫 1990 「三性説における唯識無境の意義(1)」『大谷学報』第69巻第4号、1-38頁。
1991 「三性説における唯識無境の意義(2)」『大谷学報』第70巻第4号、1-23頁。
宮下 晴輝 1978 「業雑染に関するAsaṅgaの見解」『印仏研』第27巻1号、176-177頁。
安井 広済 1954 「依他起性における雑染と清浄の問題」『印仏研』第3巻1号、242-244頁。

(あざみ のりあき 文学研究科仏教学専攻博士後期課程)

(指導教員：森山 清徹教授)

2000年10月18日受理